

表現し、どうやって彼らなりの作品へと生まれ変わらせていくのか、それを知りたい。——そこにこそ、多様な考え、多様な感性をもつ他者とともにこの世に生きている面白さが、くっきりと見えてくるように思うからです。

それを知ることができる面白さに比べたら、「自分が書いた物語が別物にされる」恐れなど、たいしたことではありません。本の読者たちだって「私と同じ読み方」をしているはずがないわけで、他者に読まれるたびに、私の物語は常に「別物」にされつづけているわけですから。

それでも、確かに、「これを外されたら私の物語ではなくなる」という要素は存在していて、それを外されたくないと思うなら、とてつもなく大変ではあります。自ら制作に関わるしかないのです。

そして、その「これを外されたら私の物語ではなくなる」という要素が、どういう類のものであるかが、アニメ化（あるいはドラマ化、映画化など）によって新たな魅力が生まれる作品であるかどうかに関わってくる、と私は思っています。

物語そのものが魅力的であったり、人物が魅力的であったりするような作品の場合は、アニメ化しようが、ドラマ化しようが、「作品の命」は消えずに、その表現なりの新たな魅力を身にまとして、立ち現れてくれるはずで

す。しかし、「文章の力」のみが作品の命を支える要素であ

る場合は、作品をまったく別物にしない限り、アニメ化は難しいでしょう。換言するならば、本をアニメ化したとき消え去ってしまう最も大きな部分が、この「文章の力」、すなわち、「文章」というものだけがもっている特殊な表現の力」だからです。

なにを当たり前のことを、と思われるかもしれませんが、この「文章の力」というものを正面から説明するのは意外に難しいもので、そういう意味では、映像化したときに失われて、ようやく、「ああ、あれは文章の力によって立ち上げられていたものだったのか」と気づく場合も多々あるでしょう。

そうであるなら、むしろ、どんな作品も映像化してみると面白いかもしれません。原作の「文章の力」が際立って浮かび上がってくるわけですから。

アニメになったからといって、原作が読まれなくなるわけではありません。それどころか多くの方々がアニメから入って、原作を読んでくださっていますし、そういう場合は比較したくなるのが、人の性^{さが}というものでしょう。

別の手段で表現されたことで、互いの魅力がどこにあるのかが良く見える——漫画原作のアニメより表現手段の違いが大きい分、この比較は、きっと様々なことに気づかせてくれるはずです。

私の場合、まず気づいたのは、「能動」と「受動」の差でした。